

香川大瀬戸内圏センター長に日仏海洋学会賞

香川大学農学部が多田邦尚教授（瀬戸内圏研究センター長）が日仏海洋学会賞を受賞し、表彰式と受賞記念講演が、去る6月10日に都内の日仏会館で行われた。受賞名は『沿岸海域の低次生物生産過程と生三元素循環に関する研究』。日仏海洋学会は、日仏会館の傘下にある26の関連学会（うち理工系8学会）の一つで、日・仏両国の海洋や水産に関係する分野の科学の協力を促進することを目的として設立された。多田教授が46人目の受賞者になる。

多田教授は、国内の代表的な閉鎖性海域である瀬戸内海で研究を展開してきた。はじめに海洋食物連鎖の出発点である植物プランクトンの一次生産量（光合成量）の測定を、瀬戸内海の全域で実施した。この成果は、わが国の沿岸海域が有する一次生産性の指標として、今もこの分野に関わる多くの研究者に引用されている。

また、大型珪藻（*Coscinodiscus wailesii*）や夜光虫（*Noctiluca scintillans*）といった時として沿岸海域で極めて大きな生物量を占めるプランクトンについて、長年にわたって生物量の増減過程と化学成分を測定。これらの生物を巡る生三元素（炭素・窒素・ケイ素など）の動きを明らかにした。

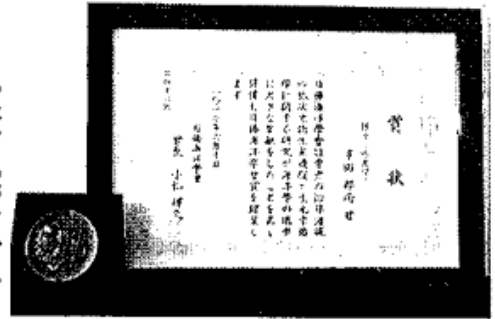
さらに、海底泥の有機物含量や底泥からの栄養塩の溶出についても研究し、高度経済成長期以降きれいになった瀬戸内海の状態を知る上で極めて重要なデータセットを提供している。これらの研究成果は、国内の沿岸海域に関わる多くの研究者に引用されている。

ここ数年、沿岸海洋学研究を幅広く続ける一方で、魚類養殖場の環境劣化や、瀬戸内海を中心に大きな問題となっている栄養塩濃度の低下、これを原因とする養殖海苔の色落ちなどにも積極的取り組み、科学的な研究成果をあげるとともに対応策を提言している。

こうしたフィールド観測に基づいた幅広い沿岸海洋研究を精力的に展開し、数多くの研究成果を上げ続けてきた功績が高く評価された。



日仏海洋学会の小松会長（左）と多田教授（右）



賞状と受賞メダル